

鉄器時代ケルノス・リングの起源と展開

四角隆二

The Origin and Diffusion of Iron Age Kernos Rings

Ryuji SHIKAKU

キーワード：ケルノス、パレスティナ、キプロス、鉄器時代

Key-words: kernos, Palestine, Cyprus, Iron Age

はじめに

古代ギリシア語であるケルノス (kernos) と呼ばれる土器がある。19世紀末頃から十分な論議を欠いたまま、シリア・パレスティナ考古学の用語としても用いられてきたため、用語に混乱が生じているように見受けられる。本稿では一般にケルノスとされるもののうち、体部が中空リング状を呈し環上に碗や鳥などのミニチュアを配するものをケルノス・リングと定義し、その構造から細分類の可能性を探った上で、系統関係を明らかにする。

ケルノス・リングの定義

ケルノスは古代ギリシアの土器形式で小碗や小壺を複合する祭祀土器とされる(図1)。これを考古遺物にあてはめたのはS. クサンスディデス (Xanthoudides) である。文献¹⁾によれば、古代ギリシアの豊穡を祝う祭りには、ケルノスあるいはケルフノス (kerkhnos) という祭器を用いたのだという。この祭器は複数の収穫物(穀物や液体など)を捧げるための小碗を持ち、中央には蠟燭やランプをとす

土器であったらしい(Xanthoudides 1905-6: 2)。彼はクレタ島のクマッサ(Koumassa)、ハギオス・ニコラス(Hagios Nikolaos)、クルテス(Kourtes)出土例などをあげ(図2)、これらが小碗などを複合する特徴をもつことからケルノスの祖型であると考えた(Xanthoudides 1905-6)。パレスティナでは本稿で扱うような中空リング片の報告はゲゼル(Gezer)(Macalister 1912: 236-238)やイエリコ(Jericho)(Sellin and Watzinger 1913: 141)にも見られるが、ケルノスの語が用いられるのはメギド(Megiddo)の報告が最初であり、Kernos ringと記述される(May 1935: 17-18)。

ケルノスを分類したのはA. ローウィ(Rowe)が最初ではないかと思われる。パレスティナの遺跡、ベト・シャン(Beth Shan)の報告の中で(1)中空リング形、(2)ボウル形、(3)スタンド形に分類し、中空リング形のみがベト・シャンから出土すると述べた(Rowe 1940: 56)²⁾。ギリシアの土

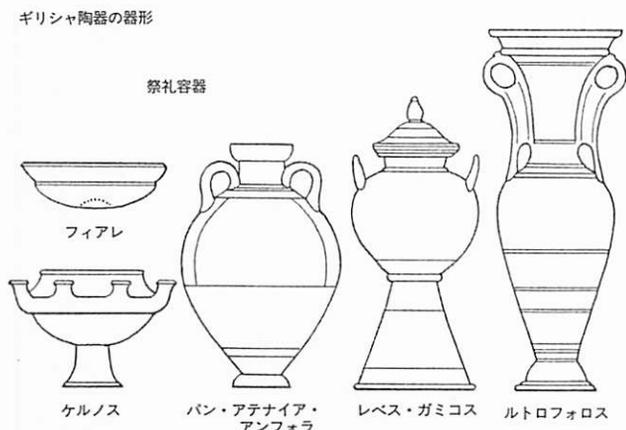


図1 ギリシアの祭礼土器
 (「世界考古学事典」(上) 平凡社1979: 290)

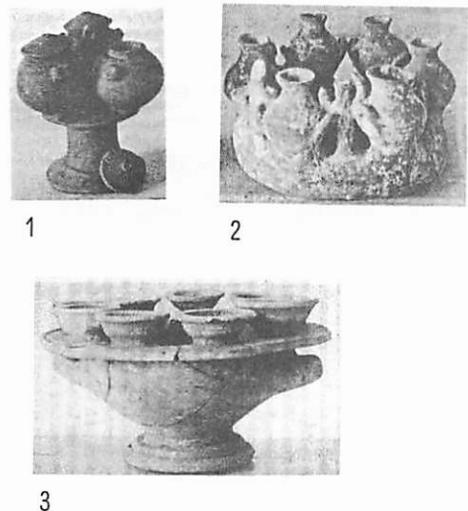


図2 クサンスディデスのケルノス (s=1/6)
 1. クマッサ出土 (Xanthoudides 1905-6: Fig. 1)
 2. クルテス出土 (Xanthoudides 1905-6: Fig. 3)
 3. ハギオス・ニコラス出土 (Xanthoudides 1905-6: Fig. 4)

器形式を体系的にまとめた A. フルマーク (Furumark) も中空リング上に3つの小壺を配する土製品を図示し、ring kernos と記述する (Furumark 1940: 67-70)。このように1940年代頃まではギリシア、シリア・パレスティナでもケルノスは「複数の小容器を複合する子持ち土器」と認識されていた。ところが、パレスティナではローウィ分類の(1)中空リング形のみが見られるため、以後、シリア・パレスティナ考古学では「ケルノス」は中空リング形を指すようになり、ケルノス・リングあるいはリング・ケルノスの用語はほとんど使われなくなった。

その後、ローウィが3分類するケルノスはそれぞれ無関係であるとし、ring vase という名称の提唱 (Mazar 1980: 108-112) や、キプロス、シリア・パレスティナ出土例 (ローウィの中空リング形) へのケルノスという名称が不適切であるという指摘³⁾ がなされたが、依然としてケルノスの用語が用いられてきた。現在、パレスティナ考古学において「複数の小容器を複合する子持ち土器」ではなく、「中空リング状の口縁部を有するボウル」にケルノス・ボウル (図3) の形式名を与えるのは、中空リング形のみが出土するパレスティナ地域の特殊性が端的に現れている。

本稿で扱うケルノスはローウィの中空リング形である。古典考古学の用語「ケルノス」をこれに当てるのは適切ではない。しかし、研究史上「ケルノス」の用語が一般的であること、他にかわる適切な用語がないことから本稿でもケルノスの用語を採用せざるを得ない。そこで原点にかえり、冒頭の要素を満たす土製品に対し、ケルノス・リングの用語を用いる⁴⁾。

研究略史

ケルノス・リングはその構造から液体を用いた祭祀に使

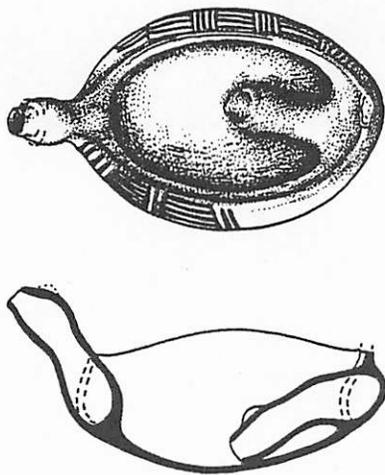


図3 ケルノス・ボウル (s=1/5)
テル・カシーレ X層出土 (Mazar 1980: Fig. 31: 1)

用されたものと推定される⁵⁾。パレスティナでは当初からキプロス、エジプトなどの類例と対比されてきた (May 1935: 17-18)。キプロスでは初期青銅器時代から鉄器時代までの展開が示され (Pieridou 1971)、パレスティナでも前4千年紀末から前3千年紀初頭と、前12~前11世紀のテル・カシーレ (Tell Qasile) など沿岸部を中心とするペリシテ文化の中に多くみられることが知られている。また若干の例は前10~前7世紀のイスラエル文化の中にも存在し、アシュドド (Ashdod) のようなペリシテ文化の影響が強く残る沿岸部の一部でも前7世紀頃まで残ることは多くの研究者が認めるところである。パレスティナでは、動物形注口、ミニチュアのザクロ、鳥といった環上の付属物の比較、彩文の特徴に着目した研究からペリシテ文化の要素が指摘され (Mazar 1980: 108-112; Dothan 1982: 222-224; Gal 1993; Borowski 1995)、今日キプロスあるいはミケーネ文化の中にその源流を求める立場が一般的である⁶⁾。環上にミニチュア土製品を持つ「中空リング状土製品」とケルノス・リングと定義し、分類を試みた拙稿も例外ではなく、キプロスとパレスティナの後期青銅器時代から鉄器時代の資料を中心に集めた結果、従来いわれてきたケルノス・リングのキプロスからの影響を追認する結論を得た。しかし、ケルノス・リングのうち、キプロス、パレスティナ両地域に存在する中期青銅器時代以前の資料に関する言及をさけた (四角 1997)。

このようにケルノス・リング研究は後期青銅器時代、鉄器時代研究の延長で議論が進められ、前12~前11世紀の東地中海における文化交流のコンテクストにおける解釈が定着してきたが、近年、起源と拡散を考察する研究が相次いでみられた。A. ビニャスカ (Bignasca) は南メソポタミアに起源し、西方へ一元的に拡散したと主張する。これまで東地中海周辺に偏りがちだった研究を前4千年紀末から後6世紀まで、イランから地中海周辺にまでひろげたことは評価されるものの分析は集成にとどまるものであり、ウルク期の円筒印章に見られる図像をその根拠とする起源論には問題がある (Bignasca 2000) ⁷⁾。一方 W. デヴァー (Dever) はキプロス、パレスティナにみられる前3千年紀のそれは個別に発展したと考える。しかし、古代イスラエル文化がペリシテ文化あるいは他の「海の民」から吸収した文化要素を列挙し、前12~前11世紀頃パレスティナ南部に盛行するケルノス・リングはキプロスから「再導入」された結果だと主張する (Dever 2000)。

ビニャスカの集成により広範な時間的・空間的分布が明らかになった今、その展開が一元的なものか、あるいは従来のように東地中海の交流の中でとらえられるのか、を考察する必要がある。そこで本稿では今まで着目されなかった分類基準、すなわち中空リングと環上の付属物の関係に

注目し、分類を試みる。

分類

分類にあたり、考慮するのは液体の環流を意図したとされるその構造である。多くの研究者はケルノス・リングを中空の体部と底部穿孔のある環上の付属物により液体の環流が重要である祭祀土器と考える (Dothan 1982 など)。しかしながら、ケルノス・リングには環上に動物形 (牛や山羊など) の注口、ミニチュアのザクロ、鳥などを有する前12～前11世紀パレスティナ、キプロスにみられる造形の優れた例が存在する一方で、環上には注口を持たず碗などミニチュア容器だけが配される例も多い。前者は水注のような用法、あるいはそれを意識して製作されたことを推測できるが、注口を有しない後者からはそのような用途を推測することは難しい。さらに、ピニヤスカの観察によれば前者は環上の付属物に穿孔があるようだが、後者には結合されるミニチュア容器に底部穿孔のないものも複数みられるようである。このように多くの研究者が重要視する「液体の循環」を意図しない構造を呈するものがみられるのはなぜか。ケルノス・リングに実用以上に象徴的意味⁹⁾をみるピニヤスカは底部穿孔のないものを「例外」と説明するが、自身も指摘するように例外とするにはその数が多いように思われる。筆者は前稿で環上の付属物に多様性がみられるキプロス例に注目し、注口の有無、把手の有無を基準に分類することで、前12～前11世紀のケルノス・リングについて「環形水注 ring-vase としての特徴を強く残すキプロス例と、環上の付属物にその影響をうかがうことのできるパレスティナ例」という認識を得た (四角 1997: 84)。このキプロス例を分類した基準である体部と付属物の関係に着目し、筆者の定義するケルノス・リングとほぼ同じ土製品を集成したピニヤスカの集成研究を整理し直し、その性質の違いを明らかにする。

1類 環上に注口を有しないもの

キプロスでは前3千年紀末から前2千年紀前半に見られ、ラピソス (Lapithos) 322号墓 (図4-5) など、脚を有するものとそうでないもの (図4-6) がみられる。パレスティナでは死海東岸のパーブ・エッドラ (Bab edh-Dhra) (図4-2, 3) にみられ、前4千年紀末から前3千年紀初頭に帰属するとされるものが多い。

残存率が低いものの北シリアのテル・コサク・シャマリ (Tell Kosak Shamali) 出土例 (図4-1) もこれに分類されよう。ピニヤスカのリストには無いが、ポスト・ウバイド期 (前5千年紀後半～末) の所産である (Nishiaki et al. 1999)。また報告者によれば、パレスティナのベト・シャン VI 層出土例 (図4-4) も注口を持たないようであ

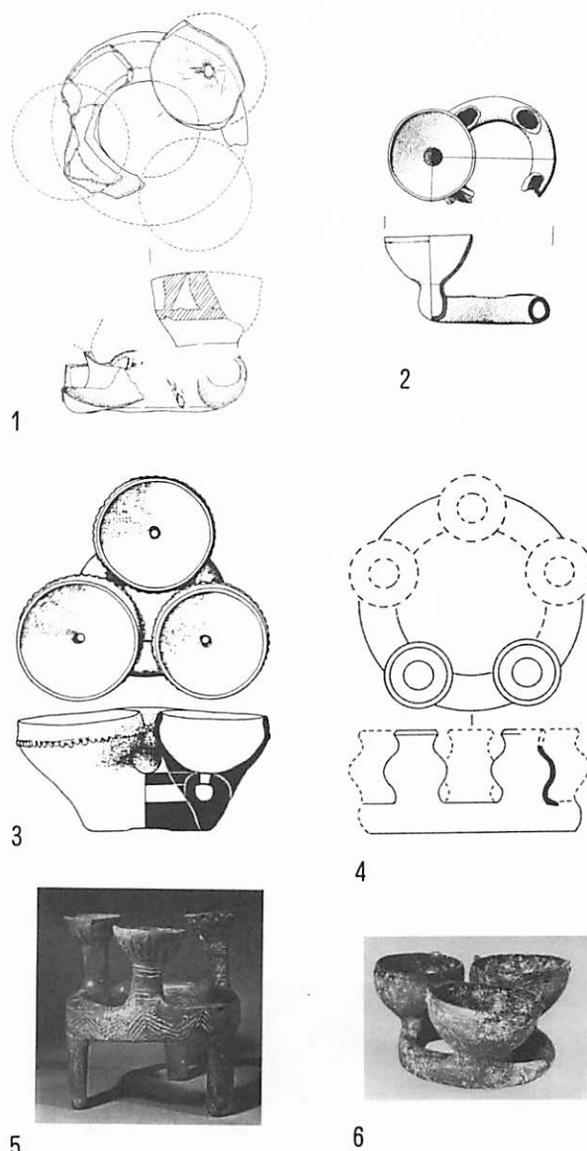


図4 1類 注口を持たないもの

(1, 4は1/8、3は1/4、2、5、6は縮尺不同)

1. コサク・シャマリ (Nishiaki et al. 1999: Fig. 13-1)
2. パーブ・エッドラ (Rast et al. 1980: Fig. 11-2) 法量不詳
3. 伝パーブ・エッドラ (Amiran 1986: Fig. 1) 最大径13.5cm
4. ベト・シャンVI層 (James 1966: Fig. 58-4) 径22.5cm
5. ラピソス322号墓 (Karageorghis 1975: Pl. 41) 径16cm
6. キプロス出土地不詳 (Karageorghis 1975: Pl. 50) 径16-17cm

る。ニューヨーク・メトロポリタン博物館収蔵品にも注口を持たない例がみられ、その彩文の特徴からキプロ・ジオメトリック期 III 期 (前850～前700) の所産と考えられる (Myres 1914: n. 809-902)。また前8世紀以降のギリシア以西にもみられる。

2類 注口を有するもの

注口を有するものには把手を有するもの (2 a類) と、

把手を有さないもの(2b類)がある。2a類は、前12世紀から前9世紀頃のキプロスを中心に存在し、最古の例は彩文の特徴から前14世紀頃に比定されている(図5-1)。プロトジオメトリック期(前11世紀)のものは環上の付属物が比較的少なく把手も大きい一方で(図5-2,3)、ジオメトリック期以降には環上のミニチュアなど付属物が多くなり、把手としての機能の退化傾向がみられる(図5-4)。

2b類は、報告者によって前18世紀に年代づけられているエブラ出土例(図6-1)が最古例である。パレスティナでは後期青銅器時代IIa期(前14世紀)に年代づけられるテル・ナミ(Tel Nami)出土例(図6-2)が最古のものであり、前12~前11世紀のキプロス、パレスティナに多く見られる(図6-3,4)。他にユーフラテス川上流のテル・バジ Tell Bazi(図6-5)、イランからも数例(図6-6)が知られる。

ピニヤスカの集成をもとに環上の付属物に注目して再検討した結果、以下のことが指摘できる。1類は比較的古い様相を呈するようであるが、若干の例は前12世紀以降にもみられる。2a類はキプロス以西を中心に分布し、シリア・パレスティナ地域にはみられない。2b類はパレスティナの初期鉄器時代に典型的なケルノス・リングであるが、最古の例は北シリアに見られる。またキプロスでは全ての類型がみられるのに対し、シリア・パレスティナでは2a類

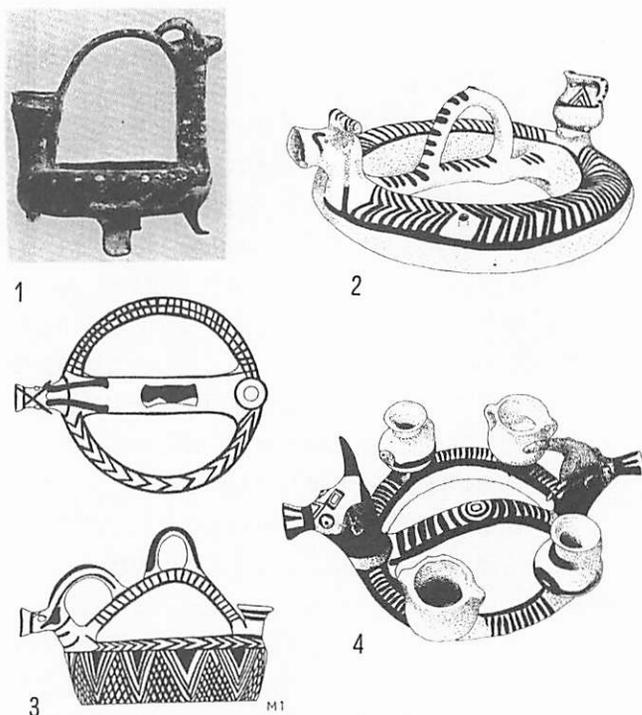


図5 2a類 注口と把手を有するもの
(3は1/6、1、2、4は縮尺不同)
1. 出土地不詳(Pieridou 1971: 9-3) 高さ24.5cm
2. イダリオン2号墓(Pieridou 1971: 9-6) 19.7cm
3. アラアス(Alaas)(Karageorghis 1975: Pl. 80 M1) 径16cm
4. Rizokarupaso-Anavrysi (Bignasca 2000: Pl. 22: C46) 径29.5cm

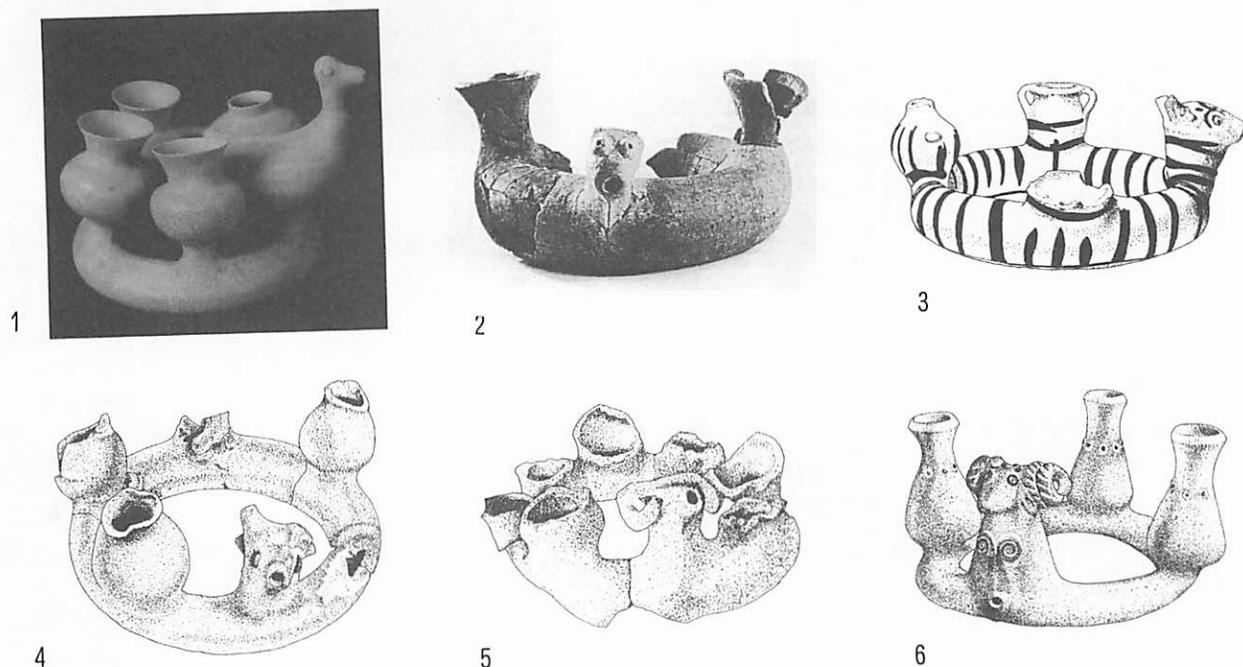


図6 2b類 注口を有し把手を有さないもの(縮尺不同)
1. エブラ(Matthiae 1995: 444) 径23.0cm
2. テル・ナミ(Artzy 1995: Fig. 2.7) 高さ7cm
3. ベト・シャンVI-V層(Bignasca 2000: Pl. 8 O74) 径17.5cm
4. 伝エンコミ(Bignasca 2000: Pl. 18 C22) 径22cm
5. テル・バジ(Bignasca 2000: Pl. 5 O43a) 径21cm
6. イラン出土(Bignasca 2000: Pl. 10 O99) 径30.5cm

を欠く。ここで問題となるのは、より古い様相を呈する1類の中に従来知られるよりも格段に古い例が北シリアで確認されたこと、東地中海の枠組みで解釈されてきた2類にも、キプロスよりもシリアにより早い出現をみるという2点である。すなわち前者はその起源問題に関して、後者は前12～前11世紀の沿岸部パレスティナに多く見られるケルノス・リングの解釈に対する再考である。

考察

起源と拡散の問題を考える前にリング上の付属物の配置について整理することで、時間的にも空間的にも広範な分布を示すケルノス・リングの性格の違いを明確にする。

まず注口を有する一群について考察する。キプロスを中心に出土する2 a類は動物形注口とミニチュア容器が対置されるという配置構成が守られおり、把手が退化し付属物が増加しても変化しない。これは東地中海周辺で青銅器時代からみられる環形水注 ring vase の特徴を受け継いでいるものと考えられる。2 b類は様々なミニチュアが配される例が多いものの、同じ配置構成が守られている。前2千年紀の海上交易センターであるテル・ナミにみられるパレスティナ地域最古の2 b類は、キプロスからの搬入品と考えられること (Artzy 1995: 22) を考え合わせると、パレスティナ初期鉄器時代の動物形注口を有するケルノス・リングはキプロスの影響を受けて成立したものではないかと考えられる (図7)。

比較的詳細な出土状況が報告されるアマサス521号墓からは、有角獣形注口を有し、二色彩文を施されるケルノス・リングとともに同様の特徴の彩文、有角獣形注口、ザクロ形容器を有するアスコスも出土している (図8)。「521号墓出土の2つのアスコスは製作者によって、あたかもケルノス・リングのように遇されていた」(Karageorghis and Iacovou 1990: 93) と解釈されるような、アスコスとケルノス・リングの関係を考えて、キプロスにおける注口を有する一群は明らかに水注としての機能を念頭において製作されていたことを示唆している。

これに対し、注口を持たず複数のミニチュア容器を持つ1類は、液体を注ぎ込む行為又は複数の液体を混合することを念頭においたものであった可能性がある。だとすれば、シリア・パレスティナ地域における2 b類の出現は水注的要素の付加、あるいは拡大をうかがうことができる⁹⁾。

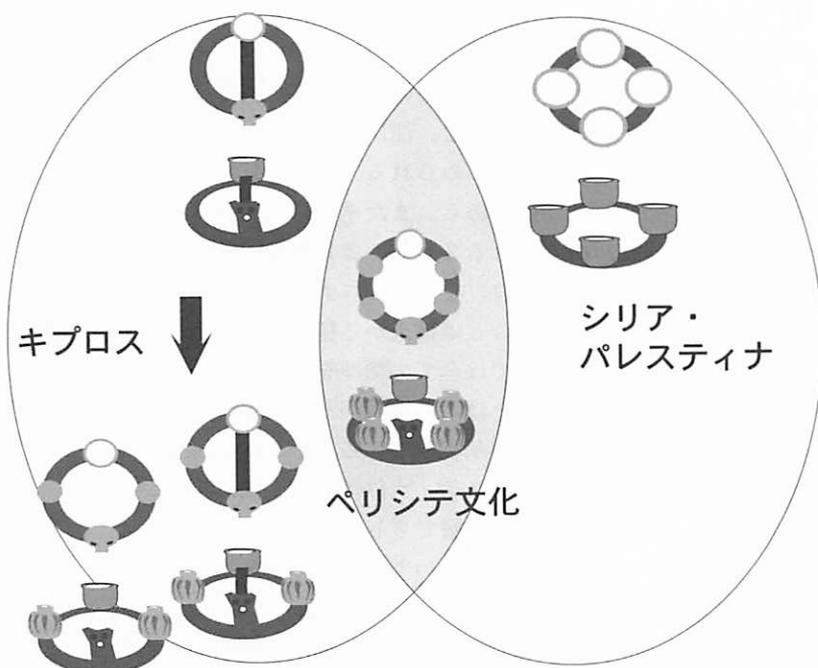


図7 前12～前11世紀の東地中海域における変遷模式図

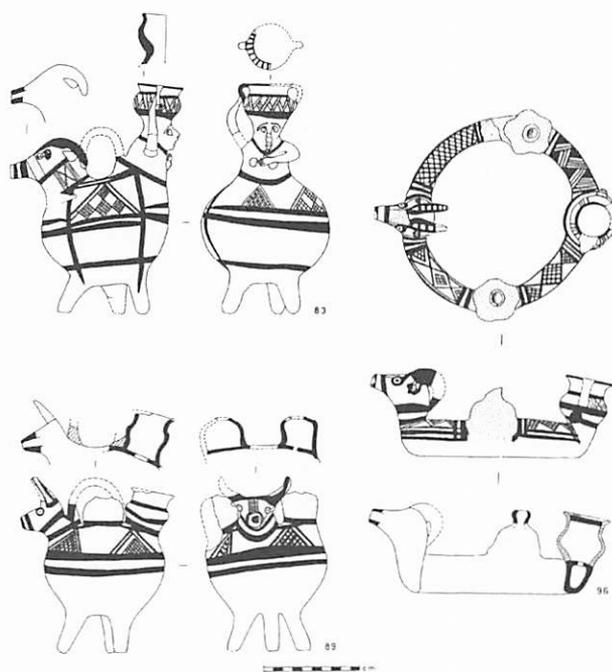


図8 アマサス521号墓出土 (S=1/8)
(Karageorghis and Iacovou 1990: Fig. 7)

ここで問題となるのは、環上に鳥形注口と4つの小壺を有するエブラ出土例の位置づけである。キプロスでは動物形注口は前14世紀頃出現するとされてきたが (図5-1, Pieridou 1971: pl. 4-9; Mazar 1980: 108-112 参照)、エブラのそれは発掘者によって前1750/1700年に年代づけら

れている。これは2類の中で把手を持たないパレスティナ初期鉄器時代のケルノス・リングの源流がシリア・パレスティナ地域内にあることを示しているのであろうか。そこでエブラ出土例の配置構成をみると、注口とミニチュア容器は対置されない。これは以降にみられる、注口を有する一群とは明らかに異なる特徴である。またキプロス、パレスティナで前14世紀以降見られる2 a類、2 b類は配置構成以外に、動物形注口、ザクロ、小鳥のミニチュアといった要素に類似点が認められることは従来から指摘されておりである。加えてキプロスでは全ての類型を確認できるなど、多様性を認められることはこの地域がその歴史的展開の中で示した役割の大きさを示唆している。

さらにベト＝シャンではパレスティナ鉄器時代I期に年代づけられるVI層で1類、VI-V層で2 b類が報告される (Rowe 1940) ことは、同地域において前3千年紀後半から前2千年紀前半の出土報告はほとんどみられないものの、1類の伝統がこの時期まで根強く残った結果と解釈できよう。すなわち、パレスティナでは前4千年紀末から続く中空リングとミニチュア容器を特徴とする1類の伝統が残る中、前14世紀頃、キプロスの影響のもと「水注的要素の強い」ケルノス・リングが「再導入された」 (Dever 1990: 125) のである。その際、注口と対置されるミニチュア容器という配置構成を受け入れながらも、把手を受け入れなかったのは、先行する文化にあった1類の伝統が根強かったからかも知れない。デヴァーによればこれらを歴史的に解釈すると、「前10～前7世紀のイスラエル文化の中に取り入れられたものも含め、パレスティナ鉄器時代のケルノスはカナン文化の伝統を残しながら、キプロスの後期青銅器時代から、鉄器時代にみられる展開そのもの、あるいはその影響を受けた」ものであり、「ペリシテ人や他の『海の民』からイスラエル人が取り入れた」文化であるという (Dever 2000: 126)¹⁰⁾。ほぼ全てが墓域から出土するキプロスに対し、鉄器時代シリア・パレスティナでは墓から出土することは稀で、中には一般住居 (Biblical Archaeology Review 1976) や城塞から出土した例もある (Wolff 1994: 496)。このような出土コンテクストの違いから想定される用途の違いも把手を受け入れなかった原因かも知れない。

以上の推測が合理性を持つならば、配置構成が異なり、時間的な隔たりもあるエブラ例は前14世紀以降にみられる2 b類とは系統を異にする事例と考えられる。

注口を持たない一群が古い様相を呈することは既に述べた。次にその起源について若干の私見を述べる。ビニヤスカは起源を南メソポタミアにもとめ、前4千年紀後半のウルク・エキスパンションにより他地域へ拡散したという。ここで注意しなければいけないのはウルク文化の中にその

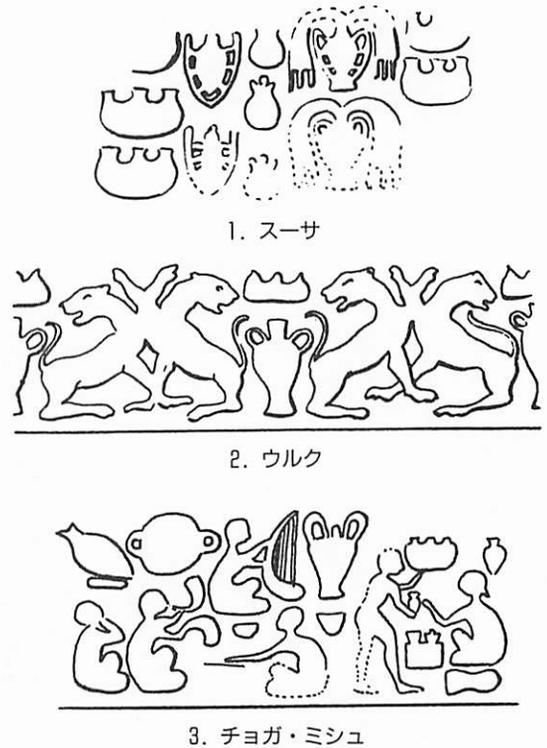


図9 ビニヤスカが根拠とする印影
(Bignasca 2000: Pl. 34より抜粋)

起源を求めるその根拠である。現在、南メソポタミアではウルク期に遡るケルノス・リングの報告は無い。そこで、その根拠としてウルク後期の円筒印章にみられる図像をあげて傍証としている (図9)。この全く新しい図像解釈に基づく仮説は興味深いのが、この図像がケルノス・リングであるという根拠が明確にされておらず、これらについてはさらに検討を進める必要がある。

ケルノス・リングの起源問題について興味深いのは、南方からのウルク文化波及以前の北シリアでケルノス・リングの存在が明らかになったことである。北シリア・ユーフラテス川上流域のテル・コサック・シャマリではポスト・ウバイド期にあたる5層から「ケルノス」 (筆者の呼ぶケルノス・リング) が出土している (Nishiaki et al. 1999)。調査概報によれば、外径20cm程度の中空円環上に底部穿孔された3つの半球状鉢をもつと推定され、現在知られる最古のものである。これによって、少なくとも注口を持たないケルノス・リングについて、かつてフルマークが指摘したオリエント起源を有力なものとする¹¹⁾。これらを考える上で、須藤寛史氏による初期円筒印章の考察は興味深い。従来、ウルク文化の要素の一つとされてきた円筒印章はその出現期の段階で「南方ウルク文化圏だけでなく、北方周縁地においても独自のコンテクストにおいて使用されていた」のだという (須藤 2001)。ケルノス・リングにおいても南メソポタミアからの一元的な拡散という結論を急ぐの

ではなく前4千年紀の地域間交流に関する検討を重ねる必要がある。いずれにしても現在、概報からの限られた情報の中であれこれ推論するのは適切ではなく、今後より詳細な報告と類例の増加を待つべきである。

以上のように最古の例が北シリアで確認されたことは、これまで東地中海の文化交流の枠組みの中で解釈が進められ、ともすれば前3千年紀のキプロスに源流を求めがちだった前12～前11世紀のケルノス・リング研究にメソポタミアとの関連という新たな課題を提示している。

まとめ

これまでケルノス・リングは、パレスティナ鉄器時代研究の中で解釈され、ギリシアあるいはキプロスに源流を求める考えが一般的であった。メソポタミア周辺から地中海にまで集成範囲を広げたピニヤスカの集成をもとに体部と環上の付属物の関係に着目した分析から、先行する注口を持たない一群は液体を注ぎ入れる、あるいは複数の液体を混合することを意図し、前12～前11世紀の東地中海周辺にみられる注口を有する一群は液体を注ぎ出すことを意図したものである可能性を指摘した。

最古の例が北シリアにみられることは¹²⁾、その絶対的な起源地としてメソポタミア周辺の重要性を示唆するだけではない。円環片のみで全体像は不明ではあるが、テペ・ガウラ Tepe Gawra IX 層 (Toblar 1950: pl. 80b)、テル・エル・ハッジ Tell el Hajj (Stucky 1972: fig. 4)、テル・ブラク Tell Brak (Oates 1977: Pl. 10a) の例を考え合わせると、その後の北メソポタミアでの継続的な展開を示す。死海東岸のバブ・エッドラも含め、鉄器時代以前のシリア・パレスティナ地域における類例にも注意を払うべきであろう。

一方、従来源流とされてきたキプロスへのシリア・パレスティナからの伝播の可能性は断定できないが、少なくとも前3千年紀末のキプロス例の中には搬入品と考えられるものはなく、脚を持つなど独自の発展がみられる。

前14世紀頃出現する注口を有する一群はキプロスにその源流を求めることが出来るが、パレスティナ地域で把手を受け入れなかったのは先行する伝統を色濃く残した文化の中に受け入れられたからである。ペリシテ文化の中で、ザクロや鳥などの意匠を付加されたあと、今度はキプロスのそれに影響を与えた。キプロスにおいて把手を持たないものが出現したり、環上の付属物の増加、把手の退化傾向の中にパレスティナからの影響がうかがえる。こうして多様化したケルノス・リングはギリシア或いはそれ以西に伝えられたが、前6世紀以降、シリア・パレスティナではみられなくなる。西方では以降も類例がみられるようになるが、その最大の特徴である「液体の貫流或いは循環」する構造

が見られなくなってしまう。東に目を向けると北西イランにも数例が確認でき、これらも注口と対置されるミニチュア容器という配置構成を持つことは注目すべきである。

以上のように、前5千年紀後半にまで遡ることのできるケルノス・リングの歴史的展開はピニヤスカのこのようなメソポタミア周辺からの一元的拡散というよりは、前2千年紀前半までのシリア・パレスティナ地域における内的展開と、前2千年紀末のキプロス・パレスティナの文化交流という2つの要素が初期鉄器時代パレスティナの造形の優れたケルノス・リングを作り出し、より西方など周辺へ拡散していったのである。

本来ならば、ケルノス・リングは祭祀との関連も検討するべきであるが、筆者の力不足と資料の限界もあり、そこまで力が及ばなかった。今後の検討課題としておきたい。

最後になりましたが本稿をまとめるにあたり、東京大学西アジア先史遺跡調査団の西秋良宏氏からは概報段階であるテル・コサック・シャマリ出土資料についての言及の便宜をはかって頂きました。また同資料を整理研究されている小泉龍人氏からは多大なご教示と温かい叱咤激励をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

註

- 1) アテナイオス (Athenaeus) の「食卓の賢人たち」(Banquet of the Learned) 第11巻476f、478d に見られるとクサンスディデスが指摘している (Xanthoudides 1905-06: 2)。アテナイオスは2世紀後半から3世紀の人。「食卓の賢人たち」はローマの騎士階級に属するラレンシスがある日催した宴の有様を友人のティノクラテスに報告した手紙という体裁をとり、賢人たちの様々な蘊蓄が記録される。
- 2) 集成では、エジプト、エーゲ海あるいはエーゲ・キプロス島、クレタ・キクラデス島といった出土地域別に分類した上で、ring-kernos, bowl-kernos, "Table"-kernos と記述している (Rowe 1940: 51)。
- 3) D. モリス (Morris) は、アテナイオスのいう「ケルノス」は豊穡を祝い、穀物など生産物を供献する祭器であったのに対し、中空リング型ケルノスはその構造から液体の循環を意図したものであろうという。従って両者は機能的に異なることが推測されるため、後者にケルノスの名称を用いるべきではないと主張する (Morris 1985: 78-80)。
- 4) 他にケルノス・リングあるいはリング・ケルノスの用語を用いるのは、McCown 1947, Oates 1977, Dothan and Dothan 1992 など少数である。
- 5) ランプとしてあるいは蠟燭を立てるといった用途は古典考古学の定義するケルノスの要素であり、今回対象とするケルノス・リングを指しているわけではない。
- 6) May 1935, Gjerstad 1948, Amiran 1963, Rowe 1940, Dothan 1982, Mazar 1980 など参照。オリエントに起源を求める説もある (Furumark 1941: 69-70)。
- 7) 筆者の定義する「ケルノス・リング」と同様の土製品を集成したピニヤスカは、シリア・パレスティナでは消滅し、地中海以西では体部が中空ではなく環上にヒュドラ、アンフォラのみが結合される例が急増するなど大きく変化する前6世紀を画期とする。そ

の論点は起源と拡散、機能、象徴的意味の考察の3点である。起源と拡散について、南メソポタミアから前4千年紀後半のウルク・エクスパンションにより他地域へ拡散した後、前3千年紀後半にピブロスなどフェニキアの都市からキプロスやエジプトに拡散し、前14世紀以降キプロスを媒介としてギリシア、さらに西方へ伝播する展開を示した。その機能として埋葬、豊穡に関わる祭祀をあげ、リュトンやアスコスの関連も指摘している。またケルノス・リングにみられる「液体の循環」「環状の体部」の2つの要素からその象徴的意味として宇宙観にまで言及、多くのページを割いているが本稿ではふれない。

- 8) 祭祀と宇宙の象徴の器具 *Stumenti di cult e immagini cosmiche* という副題にみられるようにピニヤスカは円環という特徴を宇宙の象徴とみて多くのページを割いている。
- 9) ピニヤスカは、ケルノス・リングの動物形注口はそこに口をつけて液体を吸うためのもので、注口を有しないものはストローのようなもので液体を飲んだのではないかとの仮説を示しているが、把手を有する 2 a 類の存在アマサスにおける 2 b 類と類似するアスコスの存在から明らかに水注のような用途が推定される。
- 10) このように他にイスラエル文化がベリシテや他のいわゆる「海の民」から文化を受け入れた例はひとりケルノス・リングのみならず、ミケーネ文化に源流を求められる bench tomb、フェニキアの影響と考えられる ashlar masonry などあげている (Dever 2000: 126)。
- 11) 註6 参照。
- 12) テル・コサック・シャマリ遺跡の土器報告を担当している小泉龍人氏からの個人的ご教示によると、前4千年紀前後の北シリアではおそらく同資料が最古の可能性が高いというご指摘を受けた。

参考文献

- Amiran, R. 1969 *Ancient Pottery of the Holy Land*. Jerusalem, Msada Press.
- Amiran, R. 1986 Some Cult and Art Objects of the EB I Period. In M. Kelly-Buccellatli (ed.), *Insight Thoughts through Images*. 7-11, Malibu, Undena.
- Artzy, M. 1995 Nami: A Second Millennium International Maritime Trading Center in the Mediterranean. In S. Gitin (ed.), *Recent Excavations in Israel*. 17-40, Dubuque, Kendall/Hunt Publishing.
- Ben-tor, A. (ed.) 1991 *Hazor III-IV: An Account of the Third and Fourth Seasons of Excavations, 1957-1958*. Jerusalem, Hebrew University.
- Ben-tor, A. (ed.) 1992 *The Archaeology of Ancient Israel*. New Heaven and London, Yale University Press.
- Bignasca, A. 2000 *I Kernoi Circolari in Oriente e in Occidente: Stumenti di Culto e Immagini Cosumetiche*. Orbis Biblicus et Orientalis 19. Göttingen, Vandenhoeck und Ruprecht.
- Borowski, O. 1995 The Pomegranate Bowl from Tell Haliff. *Israel Exploration Journal* 45/2-3: 150-154.
- Buchholtz H.-G. and V. Karageorghis 1973 *Prehistoric Greek and Cyprus*. New York, Phaidon Press.
- Dever, W. G. 2000 Iron Age Kernoi and The Israelite cult. In S. R. Wolff (ed.), *Studies in the Archaeology of Israel and Neighboring Lands*, 119-133. Studies in Ancient Oriental Civilization No. 59. Chicago, The Oriental Institute of the University of Chicago.
- Dikaos, P. 1932 Les cultes Préhistoriques dans l'île de Chypre. *Syria* 13/4: 345-354.
- Dothan, M. and D.N. Freedman 1982 Ashdod I, The First Season of Excavations 1962. *Atiqot* 7: 1-171.
- Dothan, M. 1971 Ashdod II-III: The Second and Third season of Excavations 1963, 1965. *Atiqot* 9-10: 1-222, 1-219.
- Dothan, T. 1982 *The Philistines and Their Material Culture*. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Dothan, T. and Dothan, M. 1992 *People of the Sea: The Search for the Philistines*. New York, Macmillan.
- Du Ménil du Buisson, R. 1935 *Le Site archéologique de Mishrifé -Qatna*. Paris, Librairie Orientaliste Paul Geuthner.
- Einwag, B and T. Otto 1996 Tall Bazi: Vorbericht über die Untersuchungen 1994 und 1995. *Damaszener Mitteilungen* 9: 15-45.
- Furumark, A. 1941 *The Chronology of Mycenaean Pottery*. Stockholm, Royal Academy.
- Gal, Z. 1976 The Kibz Sasa Kernos. *Biblical Archaeology Review* 2/2: 5
- Gal, Z. 1993 Two Kernoi from Lower Galilee. *Atiqot* 22: 121-124.
- Gjerstad, E. 1948 *The Swedish Cyprus Expedition IV/2*. Stockholm, The Swedish Cyprus Expedition.
- Karageorghis, V. 1975 *Alaas-a Protoegeometric Necropolis in Cyprus*. Nicosia, Zavallis Press.
- Karageorghis, V. 1973 *Cypriote Antiquities in the Pierides Collection Larnaka, Cyprus*. Athens, Ekdotike Athenon.
- Karageorghis, V. 1976 *The Civilization of Prehistoric Cyprus*. Athens, Ekdotike Athenon.
- Karageorghis, V. and M. Iacovou 1990 Amathus Tomb 521: A Cypro-Geometric I group. *Report of the Department Antiquities Cyprus* 1990: 75-100.
- Karageorghis, V. (ed.) 1994 *Cyprus in the 11th Century B.C.: Proceedings of the International Symposium, Nicosia*. Nicosia, University of Cyprus.
- Macalister, R. A. S. 1912 *The Excavation of Gezer 1902-1905 and 1907-1909*. London, John Murray.
- Matthie, P., Pinnock, F. and Matthiae, G. S. 1995 *Ebla: Alle Origini Della Civiltà Urbana*. Milan, Milano Electa.
- May, H. G. 1935 *Material Remains of the Megiddo Cult*. Chicago, University Chicago Press.
- Mazar, A. 1980 *Excavations at Tell Qasile*. Qedem 12, 1-153. Jerusalem, Hebrew University.
- McCown C. C., Muilenburg, J., Wampler, J. C., von Bothmer, D. and Harrison, M. 1947 *Tell en-Nasbeh I*. New Heaven, The Palestine Institute of Pacific School of Religion.
- Myres, J. L. 1914 *Handbook of the Cesnola Collection of Antiquities from Cyprus*. New York, Arno Press.
- Nishiaki, Y., T. Koizumi, M. Le Maire, and T. Oguchi 1999 Prehistoric Occupations at Tell Kosak Shamali, the upper Euphrates, Syria. *Akkadika* 113: 13-68.
- Oates, D. 1977 The Excavations at Tell Brak 1976. *Iraq* 39: 233-244.
- Pieridou, A. 1971 Kyoriaka Teletourgika Angeia. *Report of the Department Antiquities Cyprus* 1971: 18-26.
- Rast, W. E. and Schaub, R. T. 1979 Southeastern Dead Sea Plain Expedition: An Interim Report of the 1977 Season. *Annual of the American Schools of Oriental Research* 46: 1-190.
- Rast, W. E. and Schaub, R. T. 1980 Preliminary Report of the 1979 Expedition to the Dead Sea Project, Jordan. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 240: 21-61.

- Schaub, R. T. and W. E. Rast 1984 Preliminary Report of the 1981 Expedition to the Dead Sea Project, Jordan. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 254: 35-60.
- Rowe, A. 1940 *The Four Canaanite Temples of Beth-Shan*. Pennsylvania, University of Pennsylvania Press.
- Stucky, R. A. et al. 1972 *Tell el Hajj in Syrien*. Erster vorläufiger Bericht Grabungskampagne 1971. Bern, Universität.
- Tobler, A. J. 1950 *Excavations at Tepe Gawra II*. Philadelphia, University of Pennsylvania Press.
- Wolff, S. R. 1994 Archaeology in Israel. *American Journal of Archaeology* 98/3: 481-519
- Xanthoudides, S. 1905-06 Cretan Kernoï. *The Annual of the British School at Athens* 12: 2-23.
- 四角隆二 1997 「いわゆるケルノス・リングについて」『青山考古』14号 73-86頁。
- 須藤寛史 2001 「最初期の円筒印章について」『西アジア考古学』2号 111-118頁。

四角隆二
岡山市立オリエント美術館
Ryuji SHIKAKU
Okayama Orient Museum